

2002年度高島賞

## 受賞記念寄稿

増田 研

はじめに

このたび、高島奨励賞を受賞した。これまで、身の回りの数人の方々のをぞいて、誰かが自分の書いたものを読んでくれているという実感をもてなかっただけに、とてもうれしい。この機会に自分の研究をふり返りながら、これからの課題について考えてみたいと思う。その中で、受賞の対象となったふたつの論文についても触れよう。受賞記念の稿としてはあまりふさわしくないかもしれないが、自分のやってきたことを反省するのは、すくなくとも、いまの私には必要なことなのだ。

これまで発表してきたものを振り返ってみると、そこで扱われているテーマは儀礼的首長制と神話、生業とマーケット、親族とジェンダー、年齢制度、銃、教育、そして最近ではキリスト教やマスメディアまで様々である。ひとつのエスニック集団を対象にこれだけネタを拾い出してあれこれ考えをめぐらせるのだから人類学は面白い。もちろんできあがった論文どもは「広く・浅く」でしかなくなり、私の論考にある発見、論理、提案はいつも薄っぺらである。

こうしたテーマの移り変わりには、自分自身の関心に引き寄せられて、というだけでなく、周囲を漂う空気がそのように導いたという感じもある。受賞の対象となった論文「教育をめぐる政治と文化」「武装する周辺」などはさしあたりそうした空気が書かせた代物だといえる。

私の研究者としての出発は偶然と幸運に支えられていた。エチオピアはおろかアフリカについてすら何らの予備知識も持たない身でありながら、福井勝義先生のプロジェクトに加えていただいた。そこには栗本英世さんや重田眞義さん、宮脇幸生さん、松田凡さんといったフィールドワークの猛者たちがいた。エチオピアでは石原美奈子さんや佐藤廉也さん、藤本武さん、嶋田誠さんといった同年代の友人

たちと一軒家を借り、そこでの情報交換や議論を通してつねに刺激を受けることができた。

当初の私の関心は、伝統的な社会人類学の方法にのっとった社会構造の解明である。短期間ではあったが松園万亀雄先生がエチオピアに滞在され、フィールドワークについての実践的なアドバイスをいただいたことも影響している。

そのころはもっぱらバンナ内部で閉じたロジックのみを相手にしていた。そうした研究態度をとったのには、ふたつの理由があった。ひとつは、民族誌家の仕事は、まず当該社会の内的論理を的確に把握しその全体像を描き出すことにあって、国家や政治や植民地主義といった流行のテーマに手を染めるのはあとになってからでいいという、確信犯的理由である。その背後には国民国家だ植民地支配だと謳っていた研究が、私の目にはまるでつまらない代物ばかりだったということもある。

もうひとつの理由としては、バンナで生活していても外部社会とのつながりが見えにくかったということがある。エチオピアという国家の内部にあり、政治的、経済的ひろがりがあるのは自明だったが、それを人びとの生活レベルで研究材料としてとりあげるほどには実感が伴わなかったのである。アデイスアババ大学の紹介状を頼りに調査を続けているくせに、その感覚がいまもあまり変わらないのは不思議だ。

しかし世間はそれをみとめない。世界はグローバル化しつつある、もはや未開社会など存在しない、文化はボーダーレスなのだ。そうして同世代の多くの人びとがポピュラーカルチャーや「現在的」なテーマに飛びついていった。もちろん題材としては面白いが、それがバンナでできるかといえばそう簡単なことではない。私はずっとバンナを出発点にしてきたから、世間の潮流にあわせるために無理矢理

材料をほじくり出すことには抵抗を感じたのである。新しいテーマが浮上してくるのは結構だが、題材が目新しいこととテーマが新鮮であることはまったく別物なのである。

#### 武装する周辺

そもそも研究対象として銃を取り上げようと思いついたのは、バンナにおける男性ジェンダーを解き明かすためである。そのうち、バンナとグローバル界のつながりを見せるものは本当はないのかと問われたりして、意地になって手を出した題材が、銃だった。だからこの論文は、寄席にたとえるならば、あくまでも色物である。

とはいうものの、銃を調べたらなにか面白いことが分かるかもしれないという感触は、最初にフィールドワークをしたときにすでにあった。もちろん銃の現物を見るのもさわるのもこれがはじめてである。男たちと一列縦隊で歩いているときなど、前を歩く男の肩にかけた銃が私の眉間を狙っていたりして、ハラハラさせられたこともある。銃が婚資に使われていることもすぐに知った。銃と狩猟の関係が、男らしさの獲得に関わることも判明した。銃の歌もある。民族間の戦いや、政府への抵抗活動に使用された経緯もあり、銃を研究する意義があることは分かっていた。だが、研究の方法が分からなかった。

そうした中、1997年の国際エチオピア学会で松田凡さんがコエグにおける銃についての研究を発表された。そこで銃の機種を特定することが第一歩となることを理解した。「武装する周辺」を読まれた方々から、よくあそこまで調べ上げましたねとお褒めの言葉をいただいたが、方法そのものは至極オーソドックスであり、それも自分で思いついたのではなく、松田さんのアイデアを盗むかたちで始まったのである。

機種の同定は非常に難しく、いまだに探索の途上であるが、文献を買い漁り比較作業をするのは楽しかった。98年と99年には銃を重点課題のひとつにしてフィールドワークをした。銃の話はごく親しい人たちとしかできなかったが、それでも、いろいろな話を聞くことができた。人びとが持ち歩いている銃を観察し、機種を同定するのは、さながら昆虫採集のようである。中国製がほとんどのカラシニコフのなかで、ひとつだけ北朝鮮製を発見したときには、お宝を発掘したように心が躍った。

こうして得られた資料を持ち帰り、手持ちの文献

を照らし合わせることで、過去の旧式銃の機種同定を試み、その流通経路を探り当てようとするのもヴァーチャルな冒険をしているような楽しみがある。エチオピア国内史をたどり、さらには国際関係を跡づけることで、どのような種類の銃が、どこから、誰によってもたらされたのかと考える。

これらをすべて明らかにすることは、しかし不可能である。「武装する周辺」に書いたことだが、銃というモノはつねに政治的な属性をまとっており、みずからの足跡を消し去りながら移動するという特徴がある。同定作業はいまも継続中だが、ある一線より先には進めそうにない。

「武装する周辺」はこうした作業のすえに、銃についてのマテリアルを提供しながら、エスノシステム論と中心/周辺論とを接合する可能性を示すという理論的な軸を中心に展開させた論文である。2000年1月に東京都立大学社会の研究会で口頭発表を行ったが、そのときにはまだこうした軸が見いだせていなかった。その後2ヶ月ほどかけて文章化し、東京都立大学の太塚和夫先生と一字一句に至るまで検討した上で投稿したのである。

この論文は、銃という物質文化(それも工業製品)からどのような論点を引き出せるかの可能性や、今後の研究の方向を示したただけのものであり、いずれ書かれるべき「本論」のための序曲にすぎない。『民族学研究』という権威ある学術誌にすんなりと掲載されたのは、ひとえに太塚先生との再三にわたるディスカッションのおかげである。そして今のところ、はじめのきっかけであった男性ジェンダーについての分析はいっこうに進んでいない有様だ。

#### 教育をめぐる政治と文化

この論文も、それまでの私にとっては関心の外にあったテーマに、心を入れかえて取り組んだものである。学校教育を取り上げることは、国家と周辺民族の関係の一端を解き明かすことにつながるのだから、98年から99年にかけてのフィールドワークは、銃とは別に、この方面にも焦点を絞り込んでおこなわれた。

このような方面への関心は、東京周辺で石原美奈子さんや児玉由佳さんと続けてきた勉強会から受けた刺激によるところが大きい。年に数回の集まりではあったが、自分一人ではけっして手を付けられないような文献、バンナとはまったく隔たった地域の資料を読むことで、自分自身の研究がこうした潮流にどのように接近できるのかを考えるようになったの

である。そこから半ば必然的に浮上してきたのが学校教育、そしてミッション（キリスト教）という研究対象であった。

論文「教育をめぐる政治と文化」の中心となるのは、ある少女（文中ではディレという仮名を用いた）の就学をめぐる事件の詳細とその分析である。事件は1998年7月、私が村にやってくる少し前に起こり、その後の経過のほとんどを間近で見ることができた。

論文の最初の着想は、この事件の経過をひとつのドラマに見立て、それぞれの立場の人びとを役者として配置し、その相互関係を探るというものであった。その意味では、当初は人びとの政治的関係を析出するための社会学的な分析を目指していたのだが、資料を検討し文章を書き進むうちに、エチオピア全体の教育ディスクールにもふれざるを得なくなり、收拾がつかなくなってしまう。結局、ディレ事件の概要と簡単な分析を2000年のナイル・エチオピア学会で発表し、さらに同年秋にはアディスアババで開かれた国際エチオピア学会に英語論文を提出した。また寄宿舎に住みながら学校に通うバンナ学生たちへのインタビューをもとに、同年のアフリカ学会で「かれらの人生設計」という発表を行ったさいには、富永智津子先生から貴重なコメントをいただいた。こうした経緯を経て、さきの英語論文を日本語訳し、「かれらの人生設計」の資料を付し、さらに異文化間教育学という、それこそ私にとっては未知の分野の書籍を参照しながら理論的枠組みを組み立てていったのが「教育をめぐる政治と文化」という論文である。最終的には原稿用紙120枚におよぶ大部なものになってしまった。

この論文もまた不完全なものである。予備的な聞き取り調査のデータをそのまま採用したために事例数が限られており、そこから一般的な議論を導くには足腰が弱すぎる。理論的な面でも異文化間教育学や教育人類学、そしてその背景にある社会学についての不勉強がたたって典型的で単純な議論しかできていない。だが思わぬ副産物もあった。はじめは単に枠組みをいただくだけのつもりだった異文化間教育学が、意外にもアフリカに適用しにくいことが分かったのである。このことは、この学問が帰国子女や留学生、移民社会といった対象を、主として北米で追究してきたという背景によるのだと思われる。となれば、私たちがアフリカの教育にまつわる文化

的、政治的側面を分析しようと思ったときには、これまでとは異なる理論をあらたに組み直さなければならない。手応えがあるとはいえ、厄介な鉱脈につきあたってしまったものである。

主人公としてとりあげた少女ディレは、2001年に再訪したさいにすでに学校を休学していた。男子学生と関係を持ち妊娠したため、寄宿舎を追い出されたのである。当人は出産したらすぐに学校に戻る意志を持っているようだが、どうなるかはわからない。さらに驚いたことには、ディレはミッション系教会からも離脱してしまった。本人にいわせれば、「ミッションには学校にはいるために入った。本当はビールが好きなのだが、ミッションにいる間はガマンしていた。いまはおおびらにビールが飲めてうれしい」、だそうである。この事実は私の議論のある面では支えてくれるものであるが、他面ではせっかく受賞した論文に、さっそくの修正をせまるものでもある。私は理論的側面からも、事例の面からも、論文「教育をめぐる政治と文化」を叩きのめし、議論を鍛え直さないことには前に進めなくなってしまうのである。

#### おわりに

このように、これからの私の研究は、いままでの研究を破壊し、組み直すことから始めなければならない。それは現在進行中の事柄を、現場の磁力に翻弄されながらも根気よく見すえてゆく、人類学ならではの醍醐味でもある。

私は飽きっぽく、机の前にじっと座ってられない性格の人間で、移動中の電車の中や、喫茶店の中で原稿を書くことが多い。だからか、忙しくしているほうが研究ははかどる。しかしその性格が災いして、一つのテーマにこだわり続けるということもなかった。ひとつのテーマを極めると（これまた）さんざん忠告されたが、探求したいテーマが次々と湧いてきて、あちこち浮気をしているうちに、食べ散らかしたテーマたちが無残な姿でこちらを恨めしそうに見ている。

「何某が歩いた後には草も生えない」という言い方があるが、私の歩いた後はむしり残した草がぼうぼうに生えているばかりである。未練たらしく後をふり返り、ふり返りしつつ、己の仕事の雑さ加減にあきれかえりながら、また、未知の宝物を拾い損ねはしなかったかと気かけ、ナメタジのごときのろさで前に進むのである。

（ますだ けん 神奈川大学日本常民文化研究所）